

## 校長のビジョンを明確にした活力ある学校経営の推進 ～市教委の文化財課など行政及び関係機関と連携した地域教育の推進～

山梨県南アルプス市立白根源小学校 加賀美 敏

### I 現状と課題

#### 1 現状認識

地方では少子高齢化が急速に進み、地域社会が変貌していく中、ふるさとへの愛着や誇りを育み、地域社会の一員としてまちづくりにかかわる人材を育成することが求められている。

本市は15年前に6町村が合併してできた市であるが、その頃から市教委や関係団体が学校教育に積極的に関わり、ふるさとにある自然や歴史や文化財の良さを伝える活動をしている。しかしながら「全国学力・学習状況調査」の児童生徒質問紙調査では、地域や社会の出来事に関心が薄いという課題がある。

そのため、子どもの関心や態度を一層高め、ふるさとに学び、ふるさとを愛する心を育むため、教育活動全体を通じて、自然や文化などの地域の特色ある教育資源を積極的に活用した学習を工夫することが求められている。

#### 2 課題分析・アプローチの視点

まず市内の全小学校5・6年生を対象にふるさとに対する意識調査を行って、結果の分析を行う。次に学校教育と密接にかかわっている市教委の文化財課の職員から話を伺って、課題を出す。そして各校の実践から成果と課題を出し、改善方法について話し合う。

### II 研究の概要

#### 1 南アルプス市の概要

山梨県の西側、南アルプスの主峰北岳を頂点とした東西に細長い形の市で、冬は寒さが厳しく、夏は気温が高いという盆地特有の内陸性気候である。御勅使川扇状地やそれに続く低地では果樹栽培が盛んに営まれ、春から秋にかけてたくさんのフルーツが実る果樹園は、この地域を代表する景色となっている。

平成29年に策定された南アルプス市の教育振興プランの基本目標の1つ『未来を切り拓く学校教育の充実』の施策『豊かな心の育成』の柱に『ふるさと教育の推進』が位置づけられている。各学校でもふるさとを愛する児童の育成が教育目標に入っている。

#### 2 研究の内容

##### (1) ふるさとアンケートの分析

ふるさとが好きという児童は大多数だが、将来ふるさとに住むかという質問には、『わからない』『いいえ』と答えた児童が半数を占めた。外の世界を体験したい児童が多かったり、県内に就職する職種がなく首都圏に若者が流出していたりする現状の影響かもしれない。また、育成会などの地域活動に参加する児童は多いが、ボランティア活動や避難訓練に参加する児童が少ないことも明らかになった。

##### (2) 市教委等との連携について

- ・文化財課のサポートがふるさと学習を深いものになっている。教師が主体性やねらいをもって協働して取り組むことが大事である。
- ・社会科副読本の改訂を教職員と関係機関とで連携協力して行い、授業で活用しやすいようにしている。
- ・市が所有するバスがある。この市バスの利用が広い範囲での校外学習を可能にしている。

##### (3) 教育課程編成の工夫について

- ・カリキュラム・マネジメントの視点から教科横断的に学習する特色あるふるさと学習を教育課程に位置付けていく。

##### (4) 校長の役割やリーダーシップについて

- ・校長自身がリーダーシップをとり、目の前の児童の実態に合わせて願いや思いを大切に教育目標を立て、職員と共有する。
- ・教育目標に位置付けたふるさと教育について校内で研修を行う。
- ・保護者や地域住民の思いを大切にふるさと学習はどうあるべきか、保護者や地域住民との連携を深め、地域と学校を結びつけるのが校長の役割である。

### III 成果と課題

#### 1 成果

- ・ふるさとアンケートから児童の意識を知り、ふるさと教育を推進するための資料の一つとすることができた。
- ・地域資源をさらに活用し、ねらいやビジョンを持ってふるさと学習に学校が主体的に取り組むことの大切さを確認することができた。

#### 2 課題

- ・ふるさと学習を横断的な視点を持って教育課程に位置づけ指導していくことが求められる。
- ・授業時数確保のため校外学習の時間を精選しなければならない。また、地域人材や素材も新たに開拓していかなければならない。

### IV 提言

これからのグローバル化した世の中は多様な価値観の中で個人の特質や個性は尊重されなければならない。そういった世の中を生きていく子どもたちに大切なことは、日本人としてのアイデンティティーを持つことである。その資質を形作るには、学校がビジョンを持って地域と連携してふるさと学習に取り組むことが大切である。そのことが、未来をたくましく生きていく子の育成にもつながっていく。